

50 乗附氏家系と乗附流産科

石原 力

乗附流産科は中條流産科よりやや古く、その家系も医博士丹波上野介に始まり、足利氏侍医を勤め、法印を出し、三位法眼家を嗣ぐなどの名門医家であるにもかかわらず、あまりこれまで調査もなされないうえきた。『日本医学史』『日本産科叢書』竹岡友三の『医家人名辞書』に『乗附家系譜』『乗附氏系図及略伝』に基く記述がみられる。現在右史料は乗附敏信氏の所にある。今回はこれと乗附流産科の諸書に直接当り、また三宅尚齊の『白雀録』（一七〇七）中の乗附家の由緒等を参考とした。

その名は乗附・乗付・乗と書かれ、普通「ノリツケ」と読まれているが、『白雀録』には「ノツヶ」とルビが振られ、野付流と書かれることもあるので「ノツケ」が正しい。関係があるとみられる高崎市乗附町は「ノツケ

マチ」であり、白河の子孫乗附敏信氏は「ノツケ」と称しておられる。

系図では、丹波上野介（中略）——一洲法印（中略）——三喜齋——〇——〇——寿徳院法印玄由と続き、玄由の子源五郎玄頭は安中附近に住み、長男玄可が医業をついだ。次男左馬之丞為春齋は一時三位法眼糟尾久牧の家を相続して糟尾為春と称し、女科を主とした。その後乗附氏に復し、この系統は為春齋から為春、為春玄寿（陽山）、門人の多い為春海鏡、長崎へ行つた玄寿（文山）等と続く。為春玄寿は主君忍藩主阿部正武の侍医で一五〇石となつたのを次の藩主正喬に召し上げられ、二〇人扶持を受けることとなった。しかしその後も阿部家に仕え、阿部家が白河、更に棚倉と移封のたびに移つて、明治の乗附春海は九代為信で、医師であり、白河、棚倉を経て東京へ移つた。

『中條流産科全書』に附刻せられた『濃州乗付流産方』には、陣痛促進の催生順気散、骨盤位分娩で足を出す例に用いる順生散、横位で手足を出す例に用いる方、後産を下す随響散、後陣痛を治す止痛散の僅か五方の記載し

かない。佐伯理一郎は著者を為春齋であろうとしている。三位法眼糟尾家が京都にあったとすれば上州との往來の際美濃を通過したことが考えられる。

子孫春海の所にあつた「守伝之書」は棚倉へ移り、また維新の際に殆ど散亡したとされている。現在残っているものにつき、内容を記せば次の通りである。

①『乗附家伝良方録、付家伝秘方』天正九年（二五八二）二月、為春齋が玄由、玄頭から受けた家伝秘方を記したと考えられる。月水、経水、帯下、崩血、無子等の処方、胎前、臨産、産後の漢方処方、神仙丸、横産、逆産、難産等によい催生散等を記す。末尾に「右此一卷は家伝秘方たり。惘望して起請文をなすと雖も、唯一人を除くの外、伝授すべからざる者なり」とある。乗附流産科の全貌を知り得る。②『三位糟尾法眼家秘方』天正一一年一月、糟尾久牧の著書であるが産科はない。為春齋が糟尾家を嗣いだ時得たもの、③『三位法眼家伝秘方』血道、婦人之腰氣、懐妊の人の記事以外殆ど内科、④『三位法眼家伝秘方百十二種書、外題三位法眼秘方』、⑤『三位法眼家伝秘方百廿種拔書』図があり、②には本書の末尾が

なく、附加した部分があり、文章もよくなっている。本書は②より早く出来たと考えられる。⑥『乗附家伝類衆、附腹診法』かなり膨大である。⑦『痢疾一毛集』乗附海鏡齋撰、天明五年（二七八五）の症例があり、それ以後の忍藩時代の成立。海鏡君云で始まるものが殆どで、家伝云、陽山、文山の名が出る。婦人雑病、産後、乳病、小兒雑病を含む。このほか『山本流七気産前後』巻之七に⑧『野付流産前後』があり、正気散、腹中にて乳口を離れたるときの記事がある。乗附家には文山（玄寿）が「医タル者ハ人命ヲ軽易ニスベカラザル意」を蘇東坡の語を引いて書いた一卷数十字の巻物があつたという。

乗附流産科は室町時代末、初代乗附為春齋、或はその前に始まり、江戸時代から明治迄続いた家系の産科であつた。

（賛育会清風園診療所）